
仮面ライダーディケイド×IS（インフィニット・ストラトス）×とある科学

投光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド×インフィニット・ストラトスIS×とある科学

【Nコード】

N5479Z

【作者名】

投光

【あらすじ】

仮面ライダーと二つの科学が交差する

注）学園都市はあまり関係がなくなります

駄文ですがよろしく願います

ブローグ

「会場は、ここだな」

一人の16歳ぐらいの青年が広いホールみたいな会場を見てそうつぶやいた

「任務、スタート開始」

彼の言う任務は、試験会場の護衛であり、試験官み
たいな役割である

そのため決死って迷子になってはならない

「……やば、迷子だ」

前言撤回だ、こいつは迷子ばかだ

「ありゝおかしいなゝ後輩を連れてきたのになゝ」

もはや、哀れとかしかいえない状況、しかもどんどん
奥にはいっていく

——ん？」

「やはり戻ろうか？こうならこの会場ごとば——
見ると、同じ状況なのか一人の制服を着た生徒が迷っ
ていた

「あのー、試験会場はこっちですかねー」

等々にそんなことを聞かれた

「・・・い、一応いっておこう、俺は風紀委員だ」
ジャッジメント

しかし、彼は風紀委員ではない、その説明はまた次回
だ

「あゝあの学園都市の」

「でも、何ですか？ここ、学園の『外』ですよね？」

「なんか？とびきり大事なことがあるとかないとかで、
呼ばれたんだ」

「ふゝん」

「あ、そうだここにいきたいんですけど？」

「あゝっつう・・・俺も、迷子なんだわ」

「えゝゝゝ！！！」

とりあえず、二人で試験会場もとい出口を探している

「あり？そついやあゝまだ名前聞いてなかったな」

「はい、俺、織斑おりむら いちか一夏です」

「おう、俺は、十年士とねねつかひだ」

「さゝてゝ、とりあえず部屋をあたるだけあたろう」

「はい！」

で、いろいろ迷った結果ある部屋についた
あったのは、

「・・・ISだよなあゝあれ」

「たしかに」

IS、この世界では、学園都市の『外』の兵器としては最強を誇る兵器である。はつきいって学園都市とISが戦えば世界がふつゝに壊れるといわれている。なので、学園都市とIS委員会は戦争をしないという名目でこれまでの平和に保たれていた

「・・・・・・・・面白そうだ、触ってみるかあ、織斑」

「えゝ！・・・・でも、面白そうですね」

その部屋に一つだけ置いていたISに一夏が触った

ピカーーン！ISの起動音が聞こえた

「うわっ！えゝゝ起動したぜえゝい、織斑くんよ

ゝ」

「いやいや、おかしいですって、ほら、ISから離すと移動音がなくなりましたよ」

織斑はISから手を離した

「・・・・・・・・じゃあ、見間違いないか俺が試

す」

士も触ってみた、すると

ピカーーン！と起動音が聞こえた

その時、ボタン！と閉めたはずのドアが開いた、中に複数の女性がやってきた

「あななたち何やっているの！」

「防犯カメラで見たけどもう一人いたなんて、おどろきよ！」

女の人全員が携帯をかけている

「やばいことになったねー織斑くん」

「そうですね」

二人はたちすくしかできなかった

EP2 入学（前書き）

オリキャラ紹介

とおねづかさ

十年士

性格：あまり女には興味がなく、基本的にだれでも優しく接するの
でよく誤解される、だが特定の人間にしか本当のことを話さない
特徴：どこかで人間を差別しているのか、差別している人間にはフ
ルネーム、認めた人間は上の名前で呼ぶ、下の名前で呼ばれる人間
はあまりいない

EP2 入学

「ああ、学園都市はお前にまかせるよ、————あ？・
うん、荷物は『外』のホテルに送ってもらった。おう、・・・ま
あ、こつちのことは心配ないから安心しろ————じゃあな」

士は携帯を切った、それと同時に黒いスーツを着た女性が入ったきた

「おい、士、お前誰に電話していた？」

女性は知り合いに話す口調で聞いていた

「いやいや、・・・ただ、しいていうなら不格好な携帯を持ったダチかな・・・」

「そうか」

女性は少し黙った

「そういやあ、あ、学園都市と戦争にならなかったのか？・・・織斑さん？」

「ここでは、織斑先生だ、ばかもの」

「へいへいよ」

ただ、学園都市とここでは『上』と呼ばれるISの組織の上司が一時的な口論となり、戦争の引き金にもなると予想はさ

れた、だがどちらも望むことのない結果だったのでこの組織の勸奨を許さないIS学園に入れることでこの問題は解決した、その問題があつて彼は、入学式にでれなく、1日遅れで入学するかたになつた

「・・・・・・あいかわらず、私は認められてないか？」

「いんや、織斑さんを認めたら俺が認めた人間が可哀そうになるからさ」

士は、それだけ言うと織斑先生と教室に行つた

「お前たち、席に着け、今日は転校生を紹介する」

教室の中から織斑先生の声が聞こえ、スパーンと音が聞こえたが無視をしていた

「はいれ」

士はめんどくさそうな顔をしたがすぐにまじめな顔をした

「みなさん、初めまして今日から一緒に勉強する十年士です、よろしく」

ありきたりな挨拶をしたが拍手もなく沈黙が続いた

「（あり、間違えたかな）」

前を見たらほとんどの女子生徒が小刻みに震えていた

「「「お」」」

「お？」

「「「男だあああ——！！」」」

女子生徒が騒ぐ中、織斑先生と副担らしき女性が困った顔をしている

そんな中、

「あれ、土、俺てつきり学園都市に戻るのかと思うていたぞ」

空気の読めない発言に女子生徒の黄色い歓声が止む

「あれ？十年くんと織斑くん知り合いなのかな？」

「いやいや、どう考えても違うわよ」

「だって学園都市の人ですもの」

さまざまな言葉が飛ぶなか、副担の先生がまとめる

「はいはい、静かにしてください、十年くんの席は
織斑くんの後ろです」

明らかに順番的に違うのだが、先生たちの配慮だろ

席に着いた士は織斑に質問に答えていた

「なんで入学式にでなかったんだよ？」

「うん？学園都市の中からでいくための資料製作
が大変でな〜」

「ふ〜ん、そうなんだ」

「おい、二人とも」

織斑の顔色がどんどん悪くなるゆっくり後ろを向く
織斑周りも静かになる

「ち、千冬ね「織斑先生だ」——織斑先生なんです

か？」

手には出席簿があり、織斑の頭をたたく、スパーンの音はこれだと思った

「いつて~~~~~！」

織斑が自分の頭を押さえる

「次は、転校そうそう馬鹿をやった十年、お前だ」

出席簿が振り下ろされるが、そのまま空振りに終わった

「何？」

土の体がなかったからだ

「やれやれ、だれだ〜こんなところにペンを落としたのは？」

机の下から土が出てきた、どうやらまぐれでうまく逃げれたのだろう

本当にまぐれなのだろうか？

「ふつ、まあ今回は見逃してやる、これでHRは終わる、以上」

二人の先生は教室から姿を消した

「よかったな、士、まぐれでもあれを受けなくて」

「ん？ああ、そうだな」

士は手を興味無さそうにひらひらと振る

「（あれ？ 士のやつ、ペンなんて持ってないじゃないか？）」

4時間目も終わり、さすがに疲れたのか織斑はグダ
アーと机に倒れていた

「はっはっは、織斑くんも情けないねえ」

「・・・その言い方、今は突っ込まないでおく」

どうやら、かなりお疲れの様子だった

「・・・ちょっと、よろしくて？」

不意に後ろから訪ねてきた、士と織斑が振り向くと金髪のお嬢さんらしき人物がいた

士は一瞬顔を嫌にした後、部屋を出て行こうとした

「お、士さんにも、ようがあるのですよ!」

「……………」

「なんですか!そのうわっなんだよ、みたいな顔、いいから戻ってきなさい!」

もうちょつとでとどくドアを名残惜しそうに見た後、士は自分の机に戻る

「……………で、用ってなんですか、お嬢さん」

「人を子供扱いしないでくださいな!…んっんまあいいですわ」

「なあ、士……………」

「なんだい?織斑くん」

「この人……………誰?」

「まあ、私を知らない!このセシリア・オルコットを?イギリス代表候補生であり入試首席のこの私を!」

「セシリア・オルコット……………んすう〜う?どうか

っで・・・」

俺が試行錯誤している間に織斑が質問をした

「代表候補生って、なんだ？」

その質問はありか？士以外の教室にいた女子はどうもこけたらしい

「あのな、織斑くん、代表候補生ってのは国家代表IS操縦者のその候補生、確か学園都市の中にIS代表候補生という名目で簡単な検査だけで入れた気がしたなあ？」

「へ、代表候補生ってそんなにすごいのか、てつよくよく考えたら彼女と土って知り合いなのか？」

と何気に感心したり突っ込んだりする織斑だった

「あり？たしかオルコットって・・・」

「あいかわず、冗談のお得意な方ね？」

「いんや、やっぱり知らないなあ」

パン！と何かをたたく音がした、セシリアが土を平手打ちしたのだ

「ひ、ひどいですわ土さん！何も、何も覚えていないなんて！」

セシリアはただ教室から出て行った、数人の女子がセシリアを追いかけて出て行った

「・・・・・・・・・・」

士は何も言わず、真つ赤な頬を手で押さえていた

「おい、冗談はきついぞ、士」

織斑は、机から立ち上がっていた

「・・・・・・・・彼女のことは覚えているよ、ただ・・・・・・・・」

「え？おい、士！」

士は何も言わず出て行った

「————おう、俺だ、急にわりな・・・・・・・・セシリア・オルコットという名に覚えはないか？———そうか、そんな約束を、いや、後遺症じゃないんだ、タダ純粋な物忘れだ、へっ

心配性だな、あ？違う！？・・・まあいい、じゃあなっ」

ここは士が誰もいないと踏んだ外のベンチで携帯をしていた、本来なら生徒は所持を禁止されているが、学園都市とのコンタクトをするため必要だとIS学園も所持を許可してくれたのだ

「・・・やっぱ、俺」

「どンドン、記憶が消えてんのかな？」

士はベンチをおもっいきり叩いた

EP3 クラス代表？

「今年のクラス代表を決めてもらいたい」

休みの次の時間、織斑先生が授業の前にそんなことを言った

なぜか一人いないクラスみんなに

「ん？十年はどこ行った、織斑」

「え？土はどこに行っただって・・・」

事情を知っている織斑にとって言うべきか言わざるべきかわからなかった

しかし、

「いんやあゝおかしいねえゝ迷子だわ、ま・い・

」」

ボタンとドアが開いたらそこには土が立っていた

「あ、授業始まっていたか？・・・」

そう言いながらも何気に席に座ろうとする士を織斑先生が止める

「貴様・・・私の授業がそんなにつまらないか？」

「・・・そんなつまらないことで休むほど俺はバカじゃありませんよ」

士は手で電話の合図を出した

だが、それでも背景に炎が見えてしまう

「言っただけだ、二度はないと」

今度こそ、出席簿ではなくグーが飛んできた

が、

がすん、と殴った音じゃない音が聞こえた

士が振り下ろされた鉄槌バンチを手で受け止めていたか

らだ

たないんでね」

「・・・俺だって、この鉄槌は死んでも受け

織斑先生が手を士の手から外した

「・・・だが」

「へ？」

がすん！と織斑先生のもう片方の手から出席簿
が振り下ろされた

「・・・・・・・・っ~~~~」

あまりの痛みから悲鳴も出ない士

「私のパンチを受けとめるのはたいした腕だが、
まだまだ甘いぞ十年」

織斑先生は教壇に戻った

「さて、バカが遅れたのもう一度説明する、こ
のクラスから今年のクラス代表を決めてもらいたい、自薦他薦は問
わない、誰かいないか？」

「はい、織斑くんを推薦します」

クラスの女子生徒の一人がほぼ即答の速さで言った

「はい、私も」

「私も」

クラスからつぎつぎに手が挙がる

「え？何で？」

「おお、織斑くんがんばれ、がんばれ」

「なに、他人事みたいなこといったるんだよ」

「なにつて、本当に他人事だからだね」

と、男のないげない会話をよそにどんどん話が進ん

でいく

その中に

「はい、私は十年くんを推薦します」

「私も、それがいいと思います」

「いいよね」

「ほら見る、お前も選ばれているじゃないか」

織斑が少しにやけた顔で士のほうを見る

「・・・・・・・・」

「ん？、士？」

疑問に思うのも無理わない、士はふざけて嫌そう

な顔をするのではなく、本当にいやな顔をしていたのだから、違和感があった

「おい、士あゝ」

「ん、ああ、何かな、織斑くん？」

何を聞いたらしいのかわからなかった織斑は、少し困ったが話をしだした

「いや、お前もいいかげん、俺のことを一夏って呼べよなあゝって思ってた」

士は鼻で笑った

「・・・いや、俺は織斑くんと呼ばせてほしいな、悪いかい？」

「いやいいんだ、ただ、友達はみんな俺のことを一夏って呼ぶから、つい」

「俺も友達って思っているよゝただねえゝゝ」

「ん？士、どうしたんだ、相談事だった？」

「いんや、いんやなんでもない、それよりも何か決まったらみたいだぜ」

士が首で前を見るのサインがあっただので織斑は前も見て愕然とした

めるぞ」

景を見ていた

「それでは、織斑　一夏、十年　士から代表を決めるぞ」

織斑は焦っていたが士はただ楽しそうにその光

「待ってくれ、俺は――」

「納得がいきませんわ!」

声が聞こえてきた

一課が否定をした時、後ろから聞いたことのある

「…………セシリア・オルコット」

「そのような選出は認められません!男がクラス代表なんて言い恥さらしですわ」

クラスの全員がセシリアを見ている中、士だけが前を向いていた

「それに…………」

セシリアは口をかみ、士のほうを見た、士はそれ

を無視するように前を向いていた

「だいたい、文化としても行進的なこの国に住まなければならぬ私の苦勞が――」

「セシリア・オルコット――」

叫んだのは、ずっと前を向いていた土だった

「な、なんですの、今更謝つても遅いんですからね」

その話を無視するように土は机に座つて話を勧める

「これは俺の独り言だが、学園都市のダチに代表候補生と言う名目で学園都市に入つた人間を調べてもらった、その中に・・・あんたの名前があつた」

「じゃあ、思い出してくれ――」

「独り言だから答えられないが、学園都市に入つたあんたの案内役をしたのがこの俺だ、そしてこんな約束をしたらしい『いつか・・・あんたの名前を呼べる日が来れば、お前を、本当の意味で・・・愛せる女になるだろう』とふつ、我ながらうまいことを言つたねってね」

その時、クラス的女子が

「「「きゃあ――！――！――！」」」

だの、「狙ってたのに〜」

だの、明らかに告白と受け取れる言葉に興奮していた

「だが、俺は覚えていない」

その言葉に、教室が静まり返った

「そう、ですか・・・でも、なぜあの休み時間の時！私の名前を——」

「なら、今からおまえと話をしてやる、セシリア・オルコット・・・どう考えてもクラス代表は一人だ、だからお前が勝つたらお前の質問に全部答える、出来る限りなあ、だが、俺が勝つたら・・・もう、あの時の記憶を思い出させないでくれ・・・どうだ？」

セシリアは困惑したが、立ったまま悩んで答えを出した

「・・・いいですわ、かならず、かならずあなたのことを全部聞きますから！」

セシリアは土に、ビシッと指をさし宣言した

「ふっ、わけないぜえ〜セシリア・オルコット」

「はあくいい感じでしめたいが、オルコット、十年、織斑、クラス代表はもちろんESで決める、試合は次の月曜、第3アリーナで行ういいな」

「ちよつ、ちよつとまってよ、千冬ね」織斑先生だ——織斑先生、明らかに俺はのけ物の方がいいんじゃないですか？」

すると土が織斑の肩をたたいた

「どんまい、織斑くん」

簡単に言おう、織斑くんは今のはのけ物であると・・

・
・
・

お詫び

感想の中にこの私、仮面ライダー死鬼が他人の感想から逃げていると言う感想がありました。

いま思えば私はみなさまからの感想を受け付けられないようにしていました、

自分の未熟さを痛感しました。

今回のこのお詫びで、まだ許せないとお思いになれる人がいるのでしたら、私の二次小説作品はご覧にならなくて結構です。しかし、許すと言ったら変な言い方になりますが、今までのふざけた私の身勝手なことを許してくれるのでしたら、私はとてもうれいいます。

今までとは違い感想を受け付けますので、どうかこの私の今まで身勝手な行動を許してください、お願いします。

EP4 IS デイケイド(前書き)

明けてましておめでとございます
相変わらずの駄文です

EP 4 IS デイケイド

「たのむ、士！ISの訓練手伝ってくれ！この通り！」

織斑は士の机り向き手を合わせ士に指導してもらおう
と頼んだらしい

「いや、無理だから織斑くん」

「そこをなんとか、頼む」

このくだりが何回続いたことが、もう次の授業まで時
間がない

「……………ん？」

士は悩んだふりをして目を泳がせていたら窓側の長
い黒髪の女の子が見えた

「ふ〜ん……………あの子、織斑に……………まさかねえ

」

「えっ、士？どうしたんだ第の方を向いて」

どうやら、さっきの士の言葉は聞こえてないらしい、
それより

「箒い？お前・・・まさか」

「おう、彼女は篠ノ之^{しののへ}箒^{はうき}と言って俺達は幼馴染なんだよ」

笑顔で言える織斑くんが怖いと思った士である、そして士が一瞬眉間にしわをよせた

「んじゃ、あの子に教えてもらえよ、織斑くん」

「え？士なんでだよ？」

疑問に思っている織斑に士がやれやれと説明する

「あのなあ、俺とお前は次、戦うことがあるかもしれない、それに、俺よりも幼馴染さまに教えてもらう方がいいに決まっているだろうがよ」

「ん〜確かにそうだけど」

「おら、前を見る、次の授業、織斑先生だぞ」

そして、次の授業が始まった

授業が終わり放課後の職員室、織斑はさっき篠ノ之さんにISの訓練をつけてもらいに行ったらしい

田先生」

「失礼しまゝす、織斑 千冬先生はいますかねえ」山田先生」
「えっそ、そうですね。あ、いましたよ織斑せんせい」

手を振る山田先生を横目で見ながら織斑先生は士の頭上にパンチを落とした

だが、士はそれをよける

一瞬悔しそうな顔をした織斑先生は何もなかったように手を組んだ

「職員室に入る時は、ちゃんと挨拶しろ、バカ者」

「へいへい、んでちよつと話があんだわ、千冬先生」

一瞬驚いた顔をした織斑先生だったが、すぐに顔を戻した

「こっちに来い」

「ほゝゝい」

士が連れてこられたのは職員室の近くの相談室だった

「で、話はなんだ？士？」

入って早々、織斑先生が聞いてきた、
士は適当にあつたイスに座る

「織斑 千冬、お前、俺にわざとこのクラスにしたのか？」

「何のことだ？」

「とぼけるな！篠ノ之 箒、あの女、あいつの妹か？」

「そうだ」

「・・・・・・・・・・」

真面目な顔になった士は、ただ自分の手を見ていた

「んじゃ、邪魔したな」

出て行こうとした士を織斑先生が止める

「殺すのか？篠ノ之を」

士は鼻で笑った

「まあ、妹だからといって、殺すのは俺の主義じゃねえんだわ」

織斑先生は手をのけ、士を通した

「あと、これは、決まったことで異論は認めんがお前の部屋は私と同じだ」

織斑先生は士に部屋の鍵を渡した

「へっ、寮長室かい」

「文句を言うな、ちなみに私が1年の寮長だ」

「まあ、そうなるわな」

士はその場から一步も動かなかった

「ん、ああそうだ、俺、次の月曜までちよっくら学園都市^{つち}までかえるわ」

「なぜだ？」

「俺のISを迎えにいかないといけないんでねえ」

「……わかった」

「んま、適当な理由つけといてくれや」

士は歩き出し、IS学園から出て行った

次の月曜日……

「ここは、ISを待機させておく場所だろうか中には、
織斑、篠ノ之さんがいた

「士の奴、まだ風邪治ってないのですか、織斑先生」

「心配するな、織斑、あいつは来るさ」

「あ、織斑くん君のISが来ましたよ」

その時、

ブーーンと何かのエンジン音が聞こえた

「おい、一夏この音」

「気をつけろ、篤」

「なっ・・・／＼／＼」

面目な顔だ

篠ノ之さんが赤くなっているの知らず、織斑は真

バイク音が近くなる

そして、バイクが見えてきた

ていた

バイクは尋常じゃないスピードで織斑たちに迫っ

だが、バイクは二人にぶつかることなく止まった、
言い方を変えればバイクが二人の少し前で右にずれそして、壁にぶ
つかった

「あつてゝゝな、こつちが事故つたわゝゝ」

あまりの大惨事に二人は状況が飲みきれていない

らしい

バイクに乗っていた男は二人の目の前まで近づいた

「久しぶりだねゝ織斑くん」

「お前、その声、士なのか？」

何も言わずヘルメットを脱いだら案の定、士だった

「あ、んまそうなんだけどよ、背中いつて」

る土

そう言いながらのバイクの方に行きバイクを立て

「てか、いったい何なんだよそれ」

「俺の専用機かね」

土がバイクをぼんぽんたく

バイクはあれだけの事故なのに傷一つなかった、むしろ壁の方がかなりひどいことになっている

「おい、土、てめゝなに、かつこつけて事故つてんだ、情けない」

今度は奥から土や衣繊維斑と同じぐらいの男性の声が聞こえてきた

「おいおい、こっちはけが人だぞ、巧たくみ」

「といって、怪我なんかしてないだろうが」

「まあ、たしかに」

出てきた男は灰色の肩までの髪があり、目は黒い、土と同じぐらいの背がある

「土、この人は誰だ？」

を無視する

「でていけ、ここは関係者以外立ち入り禁止だぞ」

篠ノ之さんが敵意をむき出しにするが、巧はそれ

『久しぶりだな、赤光せっこう 巧たくみ』

スピーカーから織斑先生の声が聞こえた

「おう、じゃあ今からそっちに行くからな」

巧は再び奥に消えていった

『最初は、士お前が行け』

「えゝ俺がゝ」

『壁代を弁償させるぞ』

「はいはい」

しぶしぶ、士はジャケットを脱ぎバイクにまたが

った

「着てたんだな、ISスーツ」

「おう、これで外にいたら寒くてねえゝ」

士は、グリップを握るとエンジンがかかった

「こい、ディケイド」

そして、土の乗っていたバイクが消えISが現れた

色はマゼンタ、姿は仮面ライダーディケイドには似つかない形だった、ただディケイドらしさと言えば胸の部分に黒と白の右に寄っている十字のマークだけだ

「んじゃ、行ってくるわ」

「おい、土、気をつけろよ」

その言葉の後、土は何も言わずに出て行った

EP5 戦闘

アリーナに出た士は、空中に留まらず地面に降りた

上にはオルコットがいた

「出来ればあの邪魔者（織斑 一夏）を先に片付けたかったですわ」

「心配ねーよ、あいつは前より体はできているみたいだからな」

「よく今までいなかったのにわかりますわね」

「あり？もしかして心配してくれた？」

「ばっ・・・ありえせんわ！」

オルコットは顔を赤くしたが士はそれをいつもの表情で見る

「さて、・・・そろそろ始めよや」

「わかりました、私が勝ってあなたのことを根ほり葉ほり聞きましょうか！」

その言葉と同時にオルコットはライフル『スターライトmk?』で撃ってきた

「じゃあ俺はそれを阻止するか」

士はディケイドの唯一の武器『ライドブッカー』を取り出した

「しゃらあああああ!」

ソードになった武器を手でなで、そのまま空に飛んだ

「くっ、速い」

オルコットとの距離を詰めるのに3秒もかからなかった、しかしそこは代表候補生、数発のエネルギー弾を打った後さらに上空に飛んだ

「でも、この『ブルー・ティアーズ』に近距離型の武器で挑もうなんておかしいですわ」

その後も、オルコットの攻撃は止まらず、士は剣で受け止めるか、避けるを繰り返している

その攻防が続いて30秒をたったが、いまだに士はダメ

―ジを受けていない、逆にオルコットの方がエネルギーの無駄遣い
をしているのだった

「もう！何で当たりませんの！」

ついにオルコットがしびれを切らし士に喰ってかかる

「いんや、いんや、あんたの腕も大したもんよ」

士はオルコットを褒めたがオルコットにはそう聞こえ
なかったらしい

「侮辱していますの？」

「侮辱・・・ああゝゝひどい言われよう」

隙をついたとばかりセシリアが撃ってきたが、それも

士は避ける

「くっ・・・」

「お遊びはここまでかな？」

「まだ・・・・・・まだですわ！ティアーズ！」

そう叫んだ瞬間、オルコットの機体の翼の4つの部分
がのいた

その青みがかかったティアーズとよばれる機体は士に
向かってレーザーらしきものを撃ってきた

「うおっと・・・これは・・・自立起動兵器か？」

考える暇はなく向こうは撃ってくる

「この子たちから逃れることはできませんわ」

士は避けようとしたが、ティアーズの連携に負け当たってしまった

その後も攻撃は続き煙がたつ

「これで・・・終わりましたか」

オルコットが勝利を予感したが、煙の中から士が落ちていないのを見てスターライトを構える

「自立起動型射撃武器じゃなかったか、たぶんあんたが操縦をしているんだろうか、あんたはこいつらが動いている時動かなかったか、これで想像がついた」

「（読まれた、あの少ない時間で？）」

オルコットは驚いた、自分のティアーズのことをそして、士の機体のエネルギーがあれだけの攻撃をくらってまだあるということ

「まあ、これだけ攻撃、まだまだいけるねえ」

オルコットはまだ信じられなくて言葉が出ない

「がんばったんだ、俺も一つネタバレしようかねえ」

士は持っていたソードをしまった

「RIDE！」

K A M E N R I D E H I B I K I

電子音の音が聞こえた後、士の機体が紫の炎にのまれた

「え？・・・士さん！」

我に返ったオルコットは、そのまま士に近寄ろうとする

「いんや、心配しなくてもかまわない・・・はあ！」

炎から出てきた士の機体は色が紫に変わり、胸には大きな角らしきものが二つ付いていた

「これで終わらす・・・いいよな」

「なんだ、あの機体？いや、それよりも機体が変わった・・・」

モニターを見ていた織斑たちは驚いている

「あれはいつたい何だ？」

織斑先生が質問をするが巧は少し間を空けた

「学園都市のIS・・・と言えはわかるか？」

「でも、IS自体が変わるなんて知りませんよ」

山田先生が質問するが巧は答えない

「答える」

沈黙に嫌気がさし織斑先生が質問を繰り返す

「士のIS自体が特殊で、あれがああISの能力と言
える」

「これからは、もう機密事項だ、聞きたいんだつたら
あいつから聞け」

巧はモニターに映った士を指差した

「そんな・・・ISが変わるなんて」

「そんなこと、どうでもいい、もう堕ちろ」

そんな殺意に反応してオルコットがスターらいとで
撃つが士は避ける

「また、避けるだけですか？」

「・・・ATTACK」

ATTACK RIDE ONGEKIBOR

EKKA

士が取り出したのは二つの赤い太鼓のばちのような
もの、その先端に炎がついていた、士は太鼓をたたくように降ると、
炎がティアーズめがけて降り注いだ

ティアーズは避けれてのもあるが2機は炎に当たり
爆破した

「くっ・・・」

士はただ爆破していない、残りのティアーズ見ている

「性能は上々か・・・」

士はそのまま、手を上にあげ武器をしまった

「棄権します」

そしてこの戦いは終わった

「納得はいきませんわ！」

試合が終わった後、更衣室を出ようとした土をオルコットが呼びとめた

「なぜ！あなたは私との試合を放棄したのですか！？」
どうやら相当怒っているらしい

「勘違いするんじゃないよ、これはあくまで性能のテスト・・・学園都市からの命令だったんだよ」

「しかし！あなたのことを全て聞くという約束がありましたのに・・・」

「俺だって望んじゃいなかった・・・聞けよ、全部」

オルコットは戸惑ったが、土はいつものふざけた表情じゃなかった

「でわ、」

「・・・・・・・・・・」

「私との・・・その、昔の約束を本当に、本当に忘れてしまっているのですか」

「約束なんか覚えちゃいねーよ、オルコット」

泣きそうになったオルコットだが、そこはこらえた

「でわ、なぜ、忘れてのですか！士さん」

「こつから先を聞いたら、お前はぜってー学園都市を敵に回す、あげくの果ては・・・戦争だな」

「え・・・そんなこと・・・に？」

「お前も、大切なもんがあるんだろ？・・・ならそっち守れや」

士はオルコットの肩をたたき更衣室を出て行った

・
・
・
・

話は変わるがクラス代表は織斑くんになったらいい・

EP 6 転校生

「織斑くん、クラス代表――」

「なんでこうなった〜〜!?」

織斑が自分の頭に手を押さえて状況を整理しているが、土の席の近くにいたオルコットが追い討ちをかける

「それは、私が代表を辞退したからですわ」

腰に手を当て得意げに話すオルコット、それを横目で見ていた篠ノ乃さんが話をそらす

「そういえば、2組に転校生が来たとうわさになっていたな」

「そうそう、確か中国から来たっていったよ」

話を聞いていた女子生徒達がこちらに近づいてくる

「……………中国……ねえ」

「あら？土さんどうしましたの？」

中国と聞いていやな顔をしている土にオルコットが話しかける

「いんや、なんでもないんだよ・・・たぶん」

「またそうやって隠し事をしますのね」

オルコットがやれやれといった感じで首を振る

あのクラス代表を決める大会の後、オルコットは土に何度も話を聞こうと土のいる寮長室や教室で待ち伏せていたが、土は「聞きたきゃあ、聞きな」と投げやりな感じで接してきたのでオルコット自身を聞くのはやめようと決めたのだ

「しかし、この時期に転校なんて珍しいな」

話の中に入れなかった織斑がただなんとなくいった

その時

バン！と教室のドアが勢いよく開いたのだ

「一夏あゝひさし・・・ぶ・・・り」

いたのは茶色の髪をツインテールで整えた女の子だった

生き生きと入ってきたツインテールは織斑の顔を見る

前に、土の顔を見て青ざめた

土はそのツインテールを見た時に、逆に今すぐ殺すと

いった感じの気迫をだし、腕を鳴らした

「お前か、鳳^{ファン}…… 鈴音^{メイリン}」

「あれ、おい土お前、鈴^{リン}と知り合いなのか？」

明らかにさつきを読み取れていない織斑が質問してきた

「そ、そうですね！土さん、あ……あの女性と一体どうゆう関係で！？」

「お、お前もだぞ！一夏」

土が答える前に、オルコット、篠ノ乃さんが二人に質問した

「ん？関係つたら、オルコットよお？『新装開店、クラマド全壊事件』で、言うニュースであつたる」

「え、ええ、確か半年ぐらい前に学園都市に新しく、アジア地域で人気のデパート『クラマド』がオープン1日前にぼろぼろに壊されたって……」

「そう、犯人そいつ」

土が首で鈴と呼ばれたツインテールを指す

ええ~~~~~！！という声が教室中に響いた、教室にい

た全員がその事実を聞き驚いたのだ

「ば、ばか！何でそんな昔の話を掘り返すのよ！もう終わったことじゃない！」

ツインテールが逆立ち、怒っている鈴の頭に出席簿が落ちる

「いった、なにすんの・・・千冬さん」

「今は、織斑先生だ、ばか者」

鈴は仕方なく、1組の教室を出て行った

織斑先生が来て、全員が席に着こうとするときオルコットが土に質問する

「理由がわかりませんので・・・その、お昼／＼一緒に食事でも／＼」

手でOKサインを出した土、オルコットは喜んだが織斑先生のほうを見てそそくさと席に着いた

昼休み、あんなに笑顔だったオルコットは愕然としていた

ツインテールの鈴が仁王立ちして待っていたからだ

「……………あんたに用があるんだけど？」

「いいから、そこどけ、じゃまなんだが……」

後ろの列を見て鈴も納得する

「わかったわ、じゃあ、先に座って待っている」

先にラーメンを持って席を探しに行ったらしい

「オルコット、先に席探してくるから待ってくれるよね」

「ぐすつ……わかりました」

悪いなといった後席を見つけ鈴の所に行った

った

すぐに鈴を見つけた土は4人席に座っている鈴の前に座

「話は何だ？はやくしろ」

オルコットを待たせるのを悪いと思っているのかあせ
っている土

「クラス代表、一夏なんだって？」

「それがどうした？」

鈴の箸が止まる

「何であんたが一夏に負けたの？」

「俺は実際戦ってない、だから負けたとは言いきれない」

「そう……」

鈴が箸をおいた、そして一呼吸ついた

「私、あんたと戦いたい……」

「あ？」

そして、鈴がさっきまでのよりテンションが上がる

「私をここまで侮辱したのあんたが始めてよ！だから先制布告よ！クラス代表があんたじゃなくて残念だけど、私を侮辱したんだから代償は高いわよ！」

「いつている意味がわからないんだが」

「だから、あんたも私と同じ土俵で戦えるんだから、あんたも負かしてやりたいってっているんじゃないか！」

さすがにうるさくまた食堂が静かになると思ったが、外野の方がうるさく聞こえていたので、聞こえていたのは土だけだった

「……………」

士は無言で座っていた席から出ようとしていた

「まさか逃げるき？」

士はただ、手を上げ後ろにいる鈴にじゃあなと挨拶した
だけだった

オルコットが待っている席に行くと、そこに織斑や篠ノ乃
さんが座っていた

「おや、おやメンツがたくさんいますな」

オルコットの目が恐かったが士は無視をする

「いやゝ助かったよ、士開いている席が見つからなくて」

「いんや、いんや……織斑くん相談があるんだが」

「え、何だよ改まって、らしくないぞ、士」

士は髪の毛を掻き、一呼吸ついた

「お前の、クラス代表の訓練に付き合ってやるよ」

そのとき、篠ノ乃さんがいやな顔をいたのは言うまでも

ない

EP 6 転校生（後書き）

今回は、戦闘なしになりました
次回には戦闘がかけると思います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5479z/>

仮面ライダーディケイド×IS（インフィニット・ストラトス）×とある科学

2012年1月13日13時00分発行